拒絶反応について

吉行淳之介対談集

潮出版社

拒絶反応について

吉行淳之介対談集

潮出版社

拒絶反応について

一九七八
検印廃止

昭和五十三年四月十日　印刷
昭和五十三年四月二十五日　発行

著者　吉行淳之介
発行者　富岡勇吉
発行所　株式会社　潮出版社

東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話　東京(03)230〇七四一(販売部)
230〇七八一(編集部)
振替　東京五―六一〇九〇
郵便番号一〇二

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします)

印刷　第一印刷株式会社　　製本　株式会社鈴木製本所

拒絶反応について／目次

文体への二つのアプローチ……河野多恵子　7
「文章読本」とその周辺……丸谷才一　49
拒絶反応について……古井由吉　83
女体の陰翳……加山又造　129

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

湧き水について……田村隆一 147
純文学の内と外……平岡篤頼 195
小説について……和田芳恵 245
朔太郎をめぐる閑談……飯島耕一 293
あとがき 333

写真　秋山庄太郎
装幀　熊谷　博人

拒絶反応について

文体への二つのアプローチ

河野多恵子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

様式と個性と

河野　文体ということで今日いろいろお話させていただくことになりまして、この雑誌（註、『文体』）の創刊号のエッセイで吉行さんが書き出しに古井さんからお電話があったときのことを使っていらして、またそれを今日最初に使わせていただこうと思います。

それによりますと、古井さんから電話で、文体についてなにか書いてほしいと言われて、そのときとっさに、ふっと吉行さんが文体ってなんだろうと思われて、そのことを少し話し合われたようです。「彼はようやく自分の文体をもった」とか、「彼はなかなかの文章家である」という言い方のこととか、それから「文体と文章とは違いますね」と言って、「そうですね」と古井さんがおっしゃっている。それからスタイルということとか、それから書き手の個性を言ったものだろうとか、そういうことを、これはもちろん電話口でとっさにおっしゃったことで、そのあとでまた「文体はなんだと思いますか」「個性にかかわるものだと思います」というようなことで、電話口では意を尽くせない。お互いに省略が多くなってしまうということで、電

話のあとで吉行さんが、文体についてということをお考えになって……。

吉行　調べはじめるわけね。

河野　調べはじめて、それは非常によく整理をしてくだすっております。そんなところからはじめたいと思いますけれど、この整理をしてくだすっているのは、辞書を引いていただければだいたいわかること……。

吉行　ただその場合に、ぼくは、ちょっと今度必要があってBAZAARという単語を引いたわけです。そうしたら第一義が、東洋の市場、第二義が安売市とかいうような意味があってね。それから第三義に慈善市、いわゆるバザーね。この一、二、三というのは明らかに違う、同じバザーでも。英和辞典で「スタイル」を引いたときに、一、二、三と出てくる字義もいまのような違いとして、はっきり分けて考えなければいけないと思うんですね。そこが混同しちゃって……。

河野　混合して、従来はひと言では言えないけれども、スタイルということでしめくくられる……。

吉行　辞書の「スタイル」の部分にも、二つくらい出てくるけど……。

河野　三種類……いろいろあるわけで。

吉行　だからあるときは論文体とか日記体とか、そういう話をしているかと思えば、今度は個性にかかわる問題を論じているという、混乱した印象を受ける場合が多いのね。

河野　いちばん大ざっぱに制約なく言うならば、文語体、口語体、和文体、書簡体とか、美文調とか、それから個性のほうのこと、全部をひっくるめて、文体とは何かを一言で文章の特色というしかなくなりますね。

吉行　古井さんから話があるまで、文体とはなんだというのを、そう長々と考えたことなんかないわけですよ。いちばん最初に……、まあ三十年くらい前に考えたことは、これは安岡章太郎、大江健三郎両氏の対談にも出てくるけれども、なにを書くかというのといかに書くかというのと両方あると。それは、いかに書くかだけから書く人もいるというような、いろいろなことを言ってあるけれども、ぼくの場合はどうしてもなにを書くかというのが先にありましてね。そのなにを書くかというなかには、その人の守備範囲というものがあるでしょう。ということは、深く個性にかかわっていることですね。そのなにを書くかということによって、おのずからその人なりの外形が、いかに書くかという形が出てくる、それが文体だということだけ考えて、もうあとは三十年間なにも考えたことがなかった。それで今度見たらいろんな考え方があるんで、それは当然なんだけど、なんだかびっくりした。

ひとつにはぼくは守備範囲が狭いから、それですんできたと思うのだけど、ただ書くものによって文体がアメーバー状に変化して、それが極端に変化させるのを好む人と、それから好まない人と、それもまた個性だというふうにぼくは書きましたけれどね。まあどっちもそれなりにかまわないと思うのだけど。

何に文体を感じるか

河野　吉行さんはいろんな作家の文章で、どなたあたりにいちばん文体を感じますか。

吉行　文体というのは、もう既成作家という人はみんなもっていると思う。ぼくはわりに文章というのはその人の、これも大江さんが発言しているけれども、呼吸みたいなものがあって、読んでるとその呼吸のほうを先に受け取りますから、世間で悪文と言われている文章もそう感じないのね。たとえば室生犀星にしろ、武者小路実篤の文章にしろ、なにげなくずっと読んでいて、あとであれは悪文なんだと聞かされて、そういうものかなというくらいです。

　要するにこれ洒落じゃないけれども、文章が「体」をなしていないというものがあるじゃないですか。そういうものはとてもいやで、悪い文章だと感じますけれどもね。だからいちおうひとかどの仕事ができた人は、すべてこれ文体をもっているというふうに、ぼくは思っている。それが好ましい好ましくないというのを詳しく点検すれば、それはまたいろいろあるでしょう。

河野　いちおうひとかどの仕事ができた人はすべて文体をもっているという感じ方をしたうえでのことですが、私などはやっぱりいちばん強く文体として感じるのは泉鏡花とか谷崎潤一郎とか……。

吉行　谷崎さんの初期でなくて、すべてについてですね。

河野　すべてです。それから泉鏡花の場合は、もと言われていたところの文体の意味とそれからいわゆる個性ということを強く言うような意味での文体と、両方を感じますね。

吉行　もと言われていたというのは……。

河野　たとえば美文調とか文語体とか、形式、様式の意味での文体。それともっと現代的な意味での個性というのと。谷崎の場合は古典的な文体を使ったり、説話体やら、方言体やら、形式、様式も非常に選んでいるわけですけれども、私はやっぱりあれは全部現代的な意味での文体として感じてしまいますね。

吉行　そうするとやっぱり、ちょっとアクが強いほうが……。

河野　文体……。

吉行　文体というふうに、あなたは受け取りやすいわけでしょうか。ぼくは逆に、アクがないほうに感じる。たとえば梶井基次郎とか。そういえば、まあ河野さんの言う意味じゃ牧野信一はクセがあるでしょう。若いころ、とても好きでした。

河野　ただ普通に文章というときと、文体という個性というより特色ですね。普通に文章——文章というのは、これ全部含んでしまうわけだけれど、ただ文章という場合と、それから文体ということとの間に、いろんな度合いがあると思うんです。クセのある文章という言い方が適していて、文体と言っちゃあてはまらないような感じで、クセがある文章。あるいは、こうこうこういう趣の文章という言い方の程度のものもあると思うんです。

創刊号で、梶井基次郎のことを川村二郎さんとの対談を引用しておっしゃっていましたね。クセがあるようだけれど、良いお酒の喉越しのよさに近い文章という印象がある、と。私は梶井の場合は、私が独断的なのかもしれませんが、文体という気はしないんです。

吉行　そこをもう少し言っていただきたい……。

河野　クセはあるけれども非常にさらっと喉越しが水みたいだということをおっしゃっていますね、吉行さん。それはやっぱり私の言い方ですれば、梶井基次郎の場合は、あれは文体ではない。つまり特色はあります。クセというね。

それから島崎藤村の場合なども非常にクセのある文章ですわね。ところが私はやっぱりあれは文体という感じがしない。

吉行　これはこういうことじゃないかな。自分で自分の性格を点検して、ここをこう抑えて、ここをこう伸ばしてということで個性ができると……、かりにまあ、独断的にそういうことにしますと、その場合いろいろな部分を抑制していく方向にもっていくと梶井の文章みたいになってくるんじゃないか。どこかの一部分を強調するとか、なんかボタンの押し方によって、河野さんとしてはこれは文体である、これは文体と言えないと思うんじゃないでしょうか。

自然主義の場合

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.